

特別展 没後150年記念

斎藤弥九郎が 駆け抜けた 時代 1798-1871

～氷見から見る
江戸から知る～



令和3年10月15日(金)～11月7日(日)

氷見市立博物館 特別展示室 午前9時～午後5時

休館日 月曜日(10月18日・10月25日・11月1日)

資料解説会 10月16日(土)、10月24日(日)
ともに午後2時より〈参加自由〉

観覧
無料

入館にあたっては、新型コロナウイルス感染防止対策にご協力ください。
また、状況により内容が変更・中止になる場合があります。ご了承ください。

幕末の三剣豪の一人として知られる齋藤弥九郎（篤信齋）は、越中国射水郡仏生寺村（現在の氷見市仏生寺）に寛政10年（1798）に生まれ、13歳で高岡へ奉公に出た後、15歳で単身江戸に出ました。そして、明治4年10月24日（西暦では1871年12月5日）に享年74歳で生涯を閉じました。

令和3年（2021）は没後150年の記念の年にあたり、改めて弥九郎が生きた江戸後期から幕末期そして明治維新时期という時代を見つめます。

剣豪のイメージで語られることが多い弥九郎ですが、剣術者の域に留まることなく、若き時代剣術道場での修行でともに汗を流した、葦山代官江川太郎左衛門英龍の右腕として活動する中で、幕末期の歴史事件として取り上げられることが多い「蛮社の獄」「徳丸原での洋式砲術訓練」にも関わり、また「大塩平八郎の乱」、「ペリー来航」時にも江川とともに活動していることが知られています。また維新後は明治新政府に入り鉱山や造幣の分野で重要な役割を果たしました。

一方、幕末に向かうこの時期は、氷見の地においても、天保の飢饉など気候の変動や、安政の打ちこわし、度重なる氷見町での大火、加えて外国船の侵入に備えた台場築造の検討など、人々の生活が大きく揺らぎ、影響を受けた時代でもありました。

齋藤弥九郎が駆け抜けた時代を、氷見から、そして江戸からの視点で改めて紹介します。

齋藤弥九郎と交流のあった代表的な人々



水戸藩士 藤田東湖
(大洗町幕末と明治の博物館蔵)



西洋砲術家 高島秋帆
(長崎歴史文化博物館蔵)



長州藩士 吉田松陰
(山口県文書館蔵)



維新期の政治家 木戸孝允
(国立国会図書館デジタルコレクション)

表面 写真説明

●上段右 甲州微行図(江川文庫蔵)

大塩残党が甲州に入っているとの不穏な情報があったため、江川(前)と弥九郎(後)が、刀剣商の身なりで隠密に回った様子を、江川が後に思い出して描いたもの。

●上段中 齋藤篤信齋 写真(氷見市教育委員会蔵)

明治になってから撮影されたと思われる。

●上段左 齋藤篤信齋六十二歳肖像画(氷見市教育委員会蔵)

高遠藩御用絵師によって描かれたもの。藩主の内藤氏の賛がある。高遠藩への剣術等の指南の功績により贈られたもの。

●下段右 伝江川英龍自画像(江川文庫蔵)

葦山代官。青春時代ともに撃剣館で修業し、剣だけでなく、人物としても信頼のおける弥九郎を自らの右腕として登用する。江戸湾台場築造や葦山反射炉の築造に尽力。

●下段中 蒸気船フレガットの図(下田了仙寺蔵)

ペリー来航当時の木版画

●下段左 出潮引汐奸賊間集記(大阪歴史博物館蔵)

大塩の乱で、大塩勢が「救民」の旗を掲げて進軍する様子を描いたもの。

氷見市立博物館

〒935-0016 富山県氷見市本町4番9号

TEL.0766-74-8231 FAX.0766-30-7188

E-mail : hakubutsukan@city.himi.lg.jp

U R L : <https://www.city.himi.toyama.jp/section/museum/>

●交通機関

鉄道 / JR 氷見線氷見駅下車、北西へ500m 徒歩7分。

バス / 高岡駅前から加越能交通バス氷見方面行、「南大町口」下車、徒歩1分。

自動車 / 能越自動車道氷見インターから東に3km。

●氷見市立博物館は、氷見市教育文化センター内にあります。

